

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2877 号	氏名	長田 修一郎
審査担当者	主査	赤木 由人	(印)
	副主査	矢野 博久	(印)
	副主査	梅野 博仁	(印)
主論文題目： Endoscopic Analysis of Colorectal Serrated Lesions with Cancer (癌を併存する大腸鋸歯状病変の内視鏡診断)			

審査結果の要旨 (意見)

大腸内視鏡検査による癌の診断は進歩し、形態と病理の関連性が示され、それに基づいた治療方針まで検討できるようになった。Nagata らの論文は、切除後の大腸 serrated 病変に併存した癌部の内視鏡所見の特徴を retrospective に検討した研究である。

癌併存の serrated 病変は比較的特徴的な肉眼所見を有し、内視鏡検査による癌所見のパターンが有用であった。この所見は現在、治療方針の決定に大きな役割を示しており、さらなる検討の結果次第では癌の進行度診断の可能性が示唆され、治療方針決定の判断への応用が期待される。また、癌併存 serrated 病変における癌増殖因子の発現パターン、粘液産生様式にも特徴がみられ、癌化のメカニズム研究につながる結果ではないかと思われる。

これらの結果は大腸隆起性病変の診断治療に寄与するばかりでなく、大腸癌の癌化の過程においても興味深く、医学的に意義のあるものである。しかしながら、これらの結果を裏付けるには遺伝子レベルでの検討が必要である。

論文要旨

近年、大腸鋸歯状病変からの癌化 (serrated pathway) が新たな経路として注目されている。大腸鋸歯状病変から発生した癌の初期像が内視鏡的に指摘可能か否かの検討を行った。

当院で大腸内視鏡検査を受けた患者の内、病変を内視鏡的または外科的に切除され、病理組織学的に鋸歯状病変と診断された 228 病変 (HP : 75 病変, SSA/P : 75 病変, TSA : 50 病変, SSA/P+TSA : 9 病変, 癌 : 19 病変) を対象とし、内視鏡所見と病理組織診断との関係を遡及的に検討した。

結果、SSA/P の癌併存病変は、癌を併存しない病変よりも有意に年齢が高く、HP、SSA/P、TSA の癌併存病変の方が癌を併存しない病変よりも有意に病変の大きさが大きかった。内視鏡所見の検討では、癌を併存する鋸歯状病変は癌を併存しない鋸歯状病変と比較し、有意差を持つ所見として、発赤、陥凹、二段隆起、NBI での佐野分類 CP-type III, pit pattern での V 型 pit が挙げられた。

本検討では鋸歯状病変を併存する大腸癌の内視鏡診断の可能性はかなり高いと考えられた。